Hide？seek？Valentine！

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈｉｄｅ？ｓｅｅｋ？Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ！

【Ｎコード】
Ｎ８６２８Ｍ

【作者名】
ｂｒａｄｅｓ

【あらすじ】
やれやれ、古泉の変な気回しのせいで、一日ハルヒとデート、なんつう地獄としか思えないような罰ゲームを受けることとなってしまった。
っつーかおい、元々ハルヒが持ち込んだ生け贄決めゲームだっつーのに、当のハルヒが何で生け贄になってるんだ。・・・俺のせいか？
さて、そろそろバレンタインデーか。
ハルヒたちはまた面倒なイベントを考えているらしいが・・・。

０話　～ハルヒちゃんとデート　分岐ルート～（前書き）

今回は、２０１０年２月１４日まで遡り、ｍｉｘｉ日記、そして誠に恐れ多いことながら、ハルヒＳＳのコミュニティの方にも出させていただきました作品です。

コミュニティでは１～３話のみでしたが、補完せねばならない箇所がありますので、０話を一応作ってあります。
ただ、無くても若干不思議に思う程度で済むこと、漫画「涼宮ハルヒちゃんの憂鬱　４」をご覧になっていない方には０話がよく分からないことの２点から、読んでも読まなくても大丈夫なように少し手を加えてみています。

ともあれ、０話から見て頂ければハルヒとキョンの甘々な感じがより一層引き立つのではないかと思います。

0話　～ハルヒちゃんとデート　分岐ルート～

～プランＡ　買い物　ルート分岐～

「あっ、ねぇ、キョン、これなんかどうかしら？」

やれやれ・・・なんでこうなるんだ・・・。
明らかに俺への嫌がらせだろ。

そう思うほど、今回の罰ゲームは常軌を逸している。
俺と古泉がカードで遊んでたとき、暇なハルヒが思いついた当たりくじを引いた二人が生け贄、追加ルールとして古泉が罰ゲームとして当たらなかった３人を何をさせるかの決定権を与えるなんていうゲーム、何故だかしらんが俺とハルヒが罰ゲームを受けることとなった。そしてその中身は「１日デート」。当然俺もハルヒもテンションガタ落ちだ。
古泉、後でぶん殴らせろよ・・・。

「いいんじゃないか？気に入ったんなら試着してみろよ。」

まあ、ここまでならいいさ。これは誰だって思うことだ。ここまではな。

「うん、そうしてみようかしら。似合わなくても笑わないでよ？」

おーい、ハルヒさーん、その片言の日本語だと逆に周りから怪しまれちゃいますよ～？
そんなこと言ってる場合じゃない。この後のセリフ。それは絶対に俺とは縁もゆかりもないはずの言葉だ。だれか本当に俺を絞めてく

れ・・・。

「あはは、何言ってんだよ。お前は何着たって似合ってるよ。」

「もうっ、ばか。」

・・・・ありえねぇ。このセリフはマジでないぞ、古泉。確かに言ってることは正論かもしれんが、こんな状況で俺に言わせるのは絶対間違ってる。

「ガフッ！」

ああ、もはや吐血の域まで達したね。ダメージ５０％といったとこだ。

「ちょっと大丈夫？」

「大丈夫・・・・。」

ハルヒの顔も相当死んでる。もはや生気がないだろ、これ。
だがくじを引いてしまったのは俺達、ここはやるっきゃない。

「じゃあちょっと着てみるわね。」

「あ、ああ・・・。」

というわけでこちら試着室前。あのな古泉、これはおそらく全男子が思うことだとは思うが、女性服売り場に男子高校生１人ってのはキツすぎるぞ・・・。周りの視線が痛ーい。苦しい。もういやだ・・・。

見守っているであろう朝比奈さんから「キョンくん、生きて！」というテレパシーっぽいのを感じなければ俺はもはや息絶えていただろう。

「どう、かな？」

ハルヒが出てきた。確かセリフは「似合ってるぞ、可愛いな。」だったな。それを言えば・・・・。

「おー・・・」

思わず言葉を失ったね。何でも似合うとは思っていたが、コイツのセンスはぶっちゃけかなり良い。自分に最適な服ってものを理解してる。

自然と言葉が出る。

「へー、いいんじゃないか？お世辞抜きでいいと思うぞ。似合ってるな、ハルヒっ。」

あ、しまった。セリフ言ってねぇ。まあ、同じようなもんだろ。だがしかし、ハルヒは急に顔を真っ赤にし、動揺したような表情になった。

「ちょっ・・・！！台本と違う褒め方すんなっ・・・ばか・・・。」

「え？いや、これは・・・」

おーっと、気まずい、気まずすぎるぞ、この空気。とりあえず謝りゃいいのか？

「その・・・すまん・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・」

あの、ハルヒさん？貴方はいつから長門になっちゃったんですかい？そのまま黙ったままだと俺も滅茶苦茶困るんですが・・・。そんなとき、古泉が暫し休憩のサインをだした。やれやれ、少し落ち着けるな。

「どうやら、基本万能な涼宮さんは演技に集中することで慣れていたようですが、貴方の不意打ち的な普通の褒め方にどう反応していいかわからなくなって感情の制御ができなくなったんだと思われます。」

笑顔でサラッと怖いことを言うな、お前は。つまりあれか、在りのままに俺が褒めたからアイツは混乱してんのか。

やれやれ、本能って怖いな。

とまあ、その後二人で公園を歩くことになったのだが、これがまた妙に気まずい。しかも古泉のプランでは手を繋がなければならないという地獄指示付きだ。

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・ハルヒ？」

「・・・・・・何よ。」

「思ったんだが、所詮これはゲームだ。それにデートっつったって

今までの不思議探索とかと同じさ。楽しんでいこうぜ。」

「・・・アンタにしては殊勝なこと言うじゃない・・・。」

顔が真っ赤なのには変わりはなかったが、お互いこれで緊張も解けた。そりゃ楽しい方が良いに決まってるだろ、何事も。・・・こらそこ、ツンデレ乙とか言うな。

その後、古泉たちのプランはラブドリンクやら映画やらで相当気が疲れたが、まあ、楽しかったさ。

その帰り道。

「・・・はいっ」

唐突にハルヒから小さな紙袋を渡された。・・・ん？これがどうした？

「・・・今日はアンタも疲れただろうし、アンタのおかげであたしも楽しめたから・・・お礼・・・。」

中身を見ると、結構な値段がしそうな腕時計が綺麗に包装されていた。

「おお、ちょうど最近時計が壊れたんだ、サンキュー。」

「・・・！！・・・別に、アンタが可哀想に思えただけよっ。ただそれだけだからっ！」

別にそこを強調せんでもいいだろ。言われなくてもわかってるさ。

「ありがとな、今度金が溜まったら美味いもんでも食わせてやるさ。」

「・・・期待せずに待ってるわ・・・。」

そう言って、今日という恥辱の1日は終わった。

1話　～バレンタインデー特別企画！～

「今日アンタ暇よねっ！？１０時にいつもの場所へ来なさいっ！」

・・・やれやれ。何でいつもこうなんだ？

毎度のことながら俺はこのクソ寒い中自転車を全速力で漕ぎ、駅前のいつもの木の下へ突っ走った。へ？なんでそんなに急いでるのかって？

当たり前だろ、連絡あったの９時４５分なんだから。家からあそこまで４０分はかかるんだぜ？

俺がいくら自転車で速度を上げても所詮ママチャリ、更にはこういう時に限って信号全てに捕まる始末。なんていうか、これすらハルヒが望んだことのようで、地味に腹が立つ。だがいいさ、今日は俺も少しは機嫌がいいぜ。何故なら今日は2月１４日。健全な男子諸君ならば絶対に期待するであろうバレンタインデーだ。朝比奈さんの手作りチョコを食べられるならば例え火の中水の中云々・・・。ま、他二人も傍から見りゃ美少女なんだし、うまいもんを貰えるんだから、文句はないさ。

そして、この集まりの速さである。

「こらキョン！今日も遅刻だなんて、本当にやる気が見られないわ！！」

「おいおい、さすがに４０分かかる道を準備含めて１５分はきつすぎるぞ。」

「他の皆は全員あたしが来る頃には揃ってたわよ？アンタも少しは

見習いなさいよね。」

「へいへい。」

いつもながら理不尽な理屈である。無理をゴリ押し道理を粉砕ってのがコイツのコンセプトなんだろうが、一般人たる俺には無理なものは無理なんだ。

そんなことがコイツに理解できるはずがなく。

「今日は特別な日なんだからね。イベントをやるわよ！」

そして、これからハルヒが発表すること、それは俺をとことん疲れさせるための企画だった。

「これから、ＳＯＳ団バレンタインデー特別企画、市内隠れんぼ大会を行います！」

・・・は？

コイツは今なんて言った？バレンタインデー特別企画。それはいい。むしろ大歓迎だ。だが次言ったのは？『市内隠れんぼ大会』だと？

「待て待て。市内って、おかしいほど広いじゃねーか。そんな広範囲で隠れんぼなんぞやった所で、見つかるはずがねーだろ。」

「大丈夫よ！あたしが特別ルールを考えてきたから！」

・・・心配だ。

「安心していいわよ。なんたってアタシがヒントを持ってきてあげたんだからね！」

・・・なおのこと心配だ。

「ほら、つべこべ言ってないでこれを受け取りなさい。」

そう言われて渡されたのは3枚の写真。何やら公園らしきもの、図書館らしきもの、デパートらしきものの3つだ。

「なるほど、この3つの場所に、涼宮さんたちのいずれかがいる、ということですね。」

古泉も同じものを渡されたようで、じっくりと見ている。目を凝らして見てみると、確かにどれも俺が知っている場所のようだ。

「んじゃ、そっちも作戦を考えていいわよ。アタシ達も持ち場に着くから。制限時間は１８時。アンタ達が１００数えたらＯＫだから。レディゴー！」

というわけで、ハルヒ達はそれぞれに散っていった。

「んで、どうする？」

「どうやらどこも我々の知っている場所のようですね。ただ、それぞれの場所が僕達の考えている場所と一致しているのならば、どこに誰がいるのかまで予測できそうですね。」

「そうなのか？」

「おそらく一番簡単なのはこの本がたくさん置いてある図書館らしきところでしょう。図書館ならばおそらく長門さん、というのが予測できます。
さらにこの公園。よく目を凝らして見てみてください。」
は？ただの公園にしか見えないが・・・と思っていた矢先、左端にあるものを見つけた。
「なるほど、公園にいるのは朝比奈さんか。」
「ご名答です。この左端のロングスカートの裾と白いエプロンらしきもの、おそらく朝比奈さんのメイド服姿なのでしょう。」
「ということは、残りがハルヒってわけか。」
「そういうことになりますね。どうでしょう、僕は手短ですし、公園と図書館両方を回ります。貴方はデパートの方へ行ってみては？」
「・・・なんで俺がハルヒなんだ。」
「おや、僕は決して涼宮さんが貴方に見つけて欲しいと思っているなどと言っていませんよ？貴方の性格を考えて、２箇所に寄るのは嫌がるかなと思ったまでですよ。」
ちくしょう、つまりはそれが言いたかったんじゃねーか。・・・なんだろう、古泉に負けるとむしょうに腹が立つな。
「やれやれ、俺はこの一番面倒くさい仕事かよ。」
「良いではありませんか。こんなに一途に想える人は、羨ましい限

りですよ。」

「うるせー。」

「ああ、そうそう。このデパートらしき建物ですが、心当たりがあります。まずはそこへ行ってみては？」

「ほう、言ってみろ。」

というわけでＳＯＳ団による隠れんぼ大会が始まったのであった。後から思ったが、この時点では誰もこの後起きることを予想していなかったんだろうな、多分。

2話　〜”宝”探し〜

さて、俺は今デパートの目の前にいる。
相変わらずでかさだけは一級品な建物だ。それでも揃わないものが多いけどな。
どうも俺はこういった建物が好きになれないらしい、探す前からこの状態じゃあ、ハルヒを見つけるのも一苦労だろう。

そうつぶやいて、まずは地下の食品売り場へ行く。
ま、アイツのことだから暇だからとかなんとか言って、食品売り場でアイスでも喰ってんじゃないかと思い、来たわけだ。なるほど、さすがにバレンタインデーなこともあって、小洒落た店が熱心にチョコレートの宣伝をしている。
やれやれ、バレンタインの近くは人が大勢集まってそれなりの賑わいを見せているようだが、いつもは人が全然来ない。製菓業界の役得とも言えるこのイベント、一端の男子高校生から見れば金の無駄遣いな気がしないでもないがね。
そんなこんなで辺りを見回していると、ふと見覚えのある顔がチョコレートを販売している店のガラスケースにへばり付いているのを見かけた。

「谷口、お前何やってんだ？」

「キョ、キョン！？脅かすなよ、尻餅付きそうだったじゃねーか。」

「一体全体、お前がこんなチョコレートばっか見て、何を得ようってんだ？」

「い、いやぁ、別にあれじゃないぞ？自分で高そうなのを買ってお

いて、後でクラスの奴らに自慢するとか、そんな疚しいことは一切考えてねーぜ？」

ほほぅ、そういうことか。誰か、ハンマー持ってないか？ほら、某スマ〇ラとかで使う無敵の奴だ。
本当にコイツはしょうもないことしか考えないんだな。人類のアホの極みとはこのことだ。

「止めとけ、金の無駄だ。それより谷口、ハルヒ見なかったか？」

「あ？涼宮？・・・ははん、なるほど、どうせお前のことだ、涼宮がこのデパート内に隠れて、それを見つけ出すってな感じのお遊びでもやってんだろ？」

コイツは妙なところで異常な勘を示すな。案外、ずっと前に古泉に話してみたとおり、コイツも機関とやらに所属する超能力者だったりしてな。はっはっは。

「んじゃ、俺には制限時間ってのがあるんでね、先に失礼するぜ。」

「ほどほどにしとけよ？ここは公共の場なんだ、ラブラブっぷりを校外でも魅せるなんてことは止めてくれよ。」

はあ、後で谷口はしばいておこう。

2階、3階は特に心当たりの場所はなく、次に来てみたのは4階の婦人服売り場だ。
まあ、物凄く気まずいのではあるが、しょうがない、行ってみるか。
すると、また知り合いに会うことになる。やれやれ、コイツも話が

長くなりそうだな。

「やあ、キョンじゃないか。こんな所で何をしているんだい？」

「おう、佐々木か。」

ハルヒと同等の力を持つと以前に橘京子に熱演され、危うくその範疇に落ちるところだった。ま、それでもコイツは昔馴染みの友人さ。

「ここらでハルヒを見かけなかったか？」

「おやおや、デート中にはぐれでもしたのかい？」

「ちげーよ。ハルヒがＳＯＳ団で市内隠れんぼをするってんで、こうやって探してるわけだ。」

「フフ。やはり涼宮さんは面白い人だ。僕はここら辺では見かけなかったな。そうなればペットショップとか行ってみたかい？」

「ああ、そういえば行ってなかったな。」

「彼女はああ見えて生き物に優しそうだし、もしかしたら犬と戯れているかもしれないよ。」

「サンキュー、行ってみるわ。」

「キョン、涼宮さんを大事にしなくてはダメだよ。」

やれやれ、またその話に持ってかれるのか。

2時間後ーーーーーーーーー

「古泉はもう全員見つけたのか。」

「はい、朝比奈さんも長門さんも、定位置にいてくれましたので、助かりました。」

ハルヒ以外の全員が揃ったわけだ。当然ハルヒはあのデパートにはいなかったことになる。

「マズイな、残りも少なくなってきやがった。」

「・・・これ。」

長門が差し出してきたのは、俺のしている時計の写真だった。

「涼宮ハルヒがもし自分を見つけられずに迷っているようならばこれを渡して欲しいと頼まれた。」

その写真を見て、俺はハッとなる。時計、ハルヒ、デパート。そうか、なるほど、確かにそうだよな。

「おや、どうやら心当たりがあるようですね。」

「そんなところだ。」

俺はその方向へ全速力で走る。そうだ、この時計はハルヒからプレゼントされたんだったよな。

あの日、古泉の策略によって強制的にさせられた1日デートで・・・

3話　～想いの責任～

時計がたくさんあり、それぞれが異なるスピードで音を奏でているかのような場所。その近くのベンチに、ハルヒは座っていた。

「よう、ようやくみつけたぜ。」

「遅い。罰金。」

それに関してはあまり触れないで欲しいもんだ。俺だって色々大変だったんだぜ？

「アンタ・・・今日は一体何をしてたの？」

お決まりのムスッとしたアヒル顔。コイツと2年もいれば、どんな時にどんな顔をするか大体わかる。だが、俺も疲れて頭の中が何にも残ってなかったんだろう、こういう時の言葉の返しを間違えてしまった。この時の俺は、本当にどうかしてたよ。

「やれやれ、こっちのことも少しは考えて欲しいもんだ。お前らはただその場にいれば良いかもしれんが、探してるこっちは市内全部が範囲なんだから、めっちゃ疲れるに決まってんだろ。」

「・・・アンタに何がわかるのよ。」

「・・・へ？」

マズい。そう思った時にはもう遅かった。

「アンタに何がわかるってのよ！！みくるちゃんからは『今年で最後だから』って言われたし、有希からも『期待している』って言われたの！！アタシは団長として、何とかして面白い企画がないか探して、思いついたのがこれだったのよ！！
それが疲れただの、こっちの気持ちになれだの言うつもり！？自分勝手なことばっか言って、ふざけんじゃないわよ！！！」

俺は絶句した。そうだ、コイツは責任を持って一生懸命企画を考えたんだ。確かに3年生になる朝比奈さんはこれで最後だし、長門だって女性だ。この企画を楽しんでいたに違いない。
それなのに、また俺は自分のことしか考えてなかった。これじゃあの映画作りの時と同じだ。・・・俺は何も進歩しちゃいなかった。

「ハルヒ・・・俺は・・・」

「・・・もういいわ。夕食の場所は古泉君が提供してくれたみたいだし、さっさと行くわよ。」

ＳＯＳ団内で俺と古泉に１つずつチョコの入った包みが渡され、古泉の回しで結構高級なレストランへ行った。でも、俺は終始憂鬱だった。ハルヒは表では満面の笑顔だったが、俺には裏の悲しみと悔しさが伝わってきた気がする。

帰り道。古泉は急用ができたらしく、そのままそこで別れた。長門、朝比奈さんも都合によって急いで帰っていった。古泉には本当に悪いことをしちまったな・・・。

だが俺は、まだやるべきことがある。

「ハルヒ・・・。」

「・・・何よ。」

「さっきは・・・本当にすまなかった。」

「・・・・・・・・・。」

「謝っても許されないのはわかってる。俺は自分のことしか考えずに、お前の思いを無駄にし、踏みにじった。だが、だからこそここできちんと謝罪したい。」

パシンッッッ！！

頭を下げようとした刹那、強烈な痛みが走った。平手打ちか・・・だよな。そんなんで許してくれるほど神様は甘くないよな・・・。

「アタシがどういう想いで今日を迎えたか、アンタにはわかる！？今日のためにどれだけアタシが時間を割いてきたか！どれだけ今日のために準備をしたか！
アタシが何のために今日張り切っていたのか！アンタにはわかるの！？」

「・・・俺には、お前の気持ちはわからない。」

「そうね！アンタには一生わからないでしょうね！・・・えっ・・・？」

ハルヒが泣いている。表では元気に振る舞いながらも、裏では幾多の苦しみを受けて生きている。そんな表情を見た俺は、コイツを抱き締めることしかできなかった。

「アンタ・・・何やって・・・」

「ああ、俺にはお前の気持ちがわからない。その苦しみは理解することは不可能だ。だが、それでも俺はＳＯＳ団で仲良く明るい生活を送りたい。・・・これじゃあダメか？」

「・・・ふん！命拾いしたと思いなさい。」

そうして俺はハルヒを離すと、ハルヒは綺麗に包装された、綺麗な箱を俺に渡してきた。

「・・・なんだこれ？」

「帰ってから開けなさい。さっきアンタにあげたのはＳＯＳ団からのバレンタインチョコ。これは、あたしからのバレンタインよ。」

というわけで俺は今家にいる。なんだろう、そわそわするのは俺が未熟なだけだろうか？中身を恐る恐る開けてみると、そこには可愛らしいチョコと共にメッセージが入っていた。内容はこうだ。

『返事は明日すること！返事しなかったら私刑の上に死刑だから！！』

やれやれ、コイツらしいな。
そう思い、俺は携帯を取り出す。相手は・・・言わずともわかるだろ？
その相手は1コールで出やがった。まさか・・・今まで待ってたりしてないだろうな。

「何よ。」

「いいや、明日、どうしても話したいことがある。早めに部室に来てくれないか？」

「・・・うん。」

「それだけだ、じゃあな。」

「・・・おやすみ。」

これで自分に言い訳はできなくなった。遅刻もできなくなった。コイツと過ごすと、俺にとって多大な犠牲がつき物になりそうだな。
だがそれもいいさ。
だからこそ、もう一度だけ言わせてくれ。

やれやれ。

3話　～想いの責任～（後書き）

というわけで、とんでもない甘さのＳＳが出来てしまったわけですが、おそらくこれからも甘々な小説しか書けないのでしょうね（，，

風変わりなＳＯＳ団のバレンタインデー。キョンからしたら重労働なだけかもしれませんが、こんなバレンタインを人生１度でもやってみたいですねｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8628m/

Hide？seek？Valentine！

2010年10月9日17時25分発行